

# 「めだか大学通信」 5号

2012・6 岡田京子

私たちにとって「理論」とは何か (4号につづき)

## ●アメリカでのフォークソングの始まり

ちょっと堅苦しいタイトルなので、笠木さん・我夢土下座・風の座などの「フィールドフォーク」の前段の歴史を振り返ってみます。

小泉文夫氏はその発生を『おたまじゃくし無用論』(1985青土社)の中でこのように簡潔に書いておられます。

**「フォークソングとはその言葉通り民謡のことです。現代のフォークソングは、まずアメリカに出現したピート・シーガ-のような天才たちが、従来のフォークソングに、新たな20世紀の生命を蘇らせたのが始まりです。これまでヨーロッパから受け継がれて、型にはまって身動きがとれなくなっていた白人たちのフォークソングに新たな命が吹き込まれたのです」**

## ●日本で生まれたフィールドフォーク・ムーブメント

たちまち全米を風靡したフォークソングは、70年代には、岡林信康氏や高石ともや氏などによって私たちの所にもやってきて、日本のフォークソングブームを起こしたのですが、この新風をほんとうに日本人の表現として創り上げていったのは、笠木さんたちのフィールドフォーク・ムーブメントだったと思います。

今に至る40数年間、愛され続けてきた「わが大地のうた」「私の子どもたちへ」「あなたが夜明けをつげる子どもたち」「光の海」等々数々の歌が私たち庶民を潤してきました。マスコミの中でブームになっていったフォークソングとの違いは、その誕生が都会ではなく、岐阜の山の中であつたり、山口の海辺だったしたことにあるのではないかと思います。

その伴奏楽器・ギターによってアメリカの民衆の創造していった音を吸収するだけでなく、自分たちの表現が出来る風土と考えの方向を持っていたこと、それは笠木さんの、「**ぼくや田口(田口正和氏)が歌を作り始めた時、最初に据えたのは、民族的なものでありたいと言うことだった**」と言われた言葉にはっきり現れています。そしてほんとうに当初から、欧米直送だけではない自分たちの言葉と音を、直感的に模索して行った歴史があつたのです。

## ●都会で新しい創作をしていく条件

東京での経過は4号に書きましたので、一足飛びに私たちの今日のことをここでは考えて見たいと思います。

「めだか大学」のみんなは、ほとんどの人たちがギターを弾きません。20人足らずのうち、ギターが弾けるのは、わずか2人です。歌は好きだけれど、学校卒業して以来、音楽教育らしいものを受けていない、まして作曲など考えても見なかった人たちが大部分、職場や家庭の中で、ずっしりと重荷を抱えながら、この中で友達を見つけ、助け合いながら生きていく……これが新しく自分の歌を作っていく大切な条件になっていることに気づかざるを得ませんでした。

そういう意味で、都会に渦巻く外来音楽とTVから一日中流されるマスコミの音楽の中で自分自身を見つけることは、音楽経験が長ければ長いほど困難だということもわかってきました。この人たちは「めだか大学」では、とても苦勞をしたのです。反面「経験がない」と言うことは、とても有利に働いたことは皆さんは実感としてわかっていると思います。そしてみんなで行きつ戻りつしながら、進めてきた一年半でした。

## ●自分を知るキーワード「五音階」と「生命記憶」

地方で生まれていったフィールドフォークのギターが、視野を拓げるだけでなく、自分自身の表現に立ち返ることを教えてくれたように、東京では、都会の波にさらわれそうになる自分を押しとどめ、自分を取り戻していくよりどころになったのはギターではなく、日本の伝統的な基盤に立つ音階や言葉のアクセントの置き方などでした。

なぜかこの方向は、もともと「その人らしさ」が浮かび出てくるものになって行きました。その謎を解いてくれたものが、2号にも書きましたが「生命記憶」という言葉だったのです。

古生物学者・三木成夫氏によって書かれたこの言葉をみんなで話し合いました。これは教育学者の北田耕也氏が書かれた『遙かな戦後教育』の中で、著者によって引用されている言葉で、これによって私たちはどんなに勇気づけられたかわかりません。もう一度記しておきましょう。

**「生命記憶」とは人間の意識とは次元を異にした、それは「生命」の深層の中の出来事なのである。アメンバーの裾野にまでひろがる生物の山なみを舞台に悠久の歳月をかけた進化の流れの中で先祖代や営まれ、子や孫や受け継がれてきた、そのようなものでなければならぬ。」**

これは教育の問題について書かれたのですが、なんと音楽、音の世界を言い得ているのだろう、とうなるほどでした。「すべての人が、同様に持っている『生命の記憶』に基づいて生きて行きなさい」と後押しをしている言葉を知った以上「そのように」生きなければなりません。

このようなところに立っている私たちであることを認識して、最初のイベントである6月30日を迎えたいと思います。

## ●5月の各グループ

どのグループも、6月30日のそれぞれの作品の練習にほとんどの時間を使いました。後6月まで出来ないのも、まだ歌い込めないものもありますが、とにかく「やるっきゃない」のです。

その中で、[つくり小屋]では、今井治江さんの『あなたと共に』が出来ました。あなたとは、李和蓮さんのことです。これが出来るまで、今井さんはずいぶん長いこと今井さんは苦闘しました。ふありょんさんとのつきあいの中で、初めて知った歴史の事実衝撃を受けた今井さんが、やっと作れた歌なのですが、みんな本当に喜びました。なぜなら、『ハムケ』で私たちに呼び掛けてくれたふありょんさんに対する私たちの返歌が、やっと出来た思いでしたから…。

これは7月の「ハムケうたう会」でうたわれることになりました。

●4月29日「表現する森の仲間」に初出演したみやけしゅうぎさんの感想を稲川恵子さんが書いてくれましたので載せます。

「やや緊張もされていたんでしょうけれど、とても堂々と、はじめのお話も詩の創作について、曲作りについて整然と話されました。

歌は素直なまっすぐな印象を受けました。みやけさんの基礎の一面なんだなあと思いました。安達さんのピアノもそれに添う感じでした。みやけさんの前の一番手と二番手の出演者たちが、穏やかで優しい演奏だったので、それにも影響されたかも。

欲を言えば…みやけさんの曲の持っている芳醇な豊かな時間感覚も味わいたいなあと思いました。生意気な意見ですが、休符をよく意識することと（安達さんから

休符も音だよと習いました）歌っていない前奏や間奏などの間に身体を立て直すみたいなワンプッシュがあっても良いかと思いました。

でもとにかく初出演とは思えない上出来でしたから、また聴かせてくださいね。